

現代社会の動向と仏教の可能性

東洋大学学長 竹村 牧男

1 自己紹介 特に井上円了と東洋大学の紹介

東洋大学は、哲学者・井上円了（1858～1919）が1887年に創設した、「私立哲学館」に由来する大学。

普通の僧侶は多く木魚を鳴らして伽藍を守り、死人を迎えて引導を渡すのほかに、なんらの能もなければ芸もなく、お経の棒読一事をもって自己の糊口より堂宇の修繕に至るまで、一切の経費を支弁せんとす。……ここにおいて百方工夫の末、檀家の機嫌を取りて、一文たりとも受納をふやさんことをつとむるに至り、僧侶の見識と品格とは、お経の値段とともに日に増し下落するは、勢いの免るべからざるところなり。

今や日本全国の仏灯まさに滅せんとするの時なり。今や仏教総体のために生死を決せざるをえざる危急存亡の秋なり。この憲法国会の期は、万世の国基の立つ所にして、今にして仏教下風に立つときは、万世挽回する見込みこれ無く候。実に危急の時なり、九死に一生の日なり、一カ寺、一住職のために汲々するの時にあらず、一地方、一部落のために奔走すべき時にあらず。……（明治22年8月28日付井上円了悟宛書簡）

円了は、その年の秋には京都の各宗本山を歴訪し、「仏教を公認せよ」という建白書を内務省に提出しようという議を訴え、各宗本山では一致してその実現に協力することに同意した。それで、帰京後ふたたび東京の各宗寺院をまわって諒解を得、各宗連合を結成した。その結果、請願書は大内青巒が執筆して、各宗の印をとり、提出のてはずがととのった。

そもそも大聖釈迦牟尼仏は、ひとたび摩耶夫人の体内に宿りしより、沙羅双樹の間に円寂を示せしまではもちろん、その遺教の今日に伝わりて、四億五億の生霊が随喜追慕してやまざるありさまを考うるに、宇宙の一大精神が発動開現して、この大覚者を降誕せしめたるやの感なきにあらず。…（釈尊の一生）…これ、あに宇宙の大勢力の活動発現にあらずしてなんぞや。

余が釈迦牟尼を仰ぎて、大聖と称し大覚者と呼び、「天上天下唯我独尊」と賛嘆するは、全くこの大精神の発動にあり。けだし、その門を出でて生死を觀ずるや、あまねく一切衆生を済度せんとする無二の大願と、無限の大悲との一心、にわかに内に動きて制せんと欲するも制すべからず、とどまらんと欲するもとどまるべからざりしは明らかなり。すなわちその一心たるや、自己の一心にあらずして無我の一心なり、相對の一心にあらずして絶対の一心なり、有限の一心にあらずして無限の一心なり。換言すれば、無始以来この大宇宙が懷抱しきたれる至高至大の精神が、忽然として釈迦牟尼の心底をわき出でたるものなるを信ず。

2 現代社会の動向 I 絶対的なものの喪失と価値観の拡散

第1に、思想的・文化的方面において、絶対的なものが失われた時代である。

キリスト教・マルクシズム・科学への信頼感の喪失。

人間が拠るべき究極の価値観というものが見失われている、それゆえ、まったく価値観が拡散し、混乱しているという状況が、今日の時代にある。

3 現代社会の動向Ⅱ グローバリゼーションと保護主義の台頭

第2に、社会システムの問題として、主に経済的に、効率と業績のみを重視する競争原理が、グローバル・スタンダードとして今日の世界を支配しており、その過程の中で、南北間格差の問題や環境問題などが現れている。

国連では、21世紀に入ってから昨年・2015年までの15年間に達成すべき目標として、8つのゴール、21のターゲットからなる「ミレニアム開発目標」(Millennium Development Goals: MDGs)を掲げた。さらに2016年からの次の15年間に達成すべき目標として、17の持続可能な開発目標と169項目のターゲット等からなる、「私たちの世界を転換する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」(Transforming Our World: 2030 Agenda for Sustainable Development: SDGs)を採択している。その内容は以下のよう。

- ① あらゆる場所で、あらゆる形態の貧困に終止符を打つ
- ② 飢餓に終止符を打ち、食料の安定確保と栄養状態の改善を達成するとともに、持続可能な農業を推進する
- ③ あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を推進する
- ④ すべての人々に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する
- ⑤ ジェンダーの平等を達成し、すべての女性と女児のエンパワーメントを図る
- ⑧ すべての人々のための持続的、包摂的かつ持続可能な経済成長、生産的な完全雇用およびディーセント・ワークを推進する
- ⑨ レジリエントなインフラを整備し、包摂的で持続可能な産業化を推進するとともに、イノベーションの拡大を図る
- ⑩ 国内および国家間の不平等を是正する
- ⑬ 気候変動とその影響に立ち向かうため、緊急対策を取る
- ⑰ 持続可能な開発に向けて実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する

マイケル・サンデル（ハーバード大学教授）は、「現行のグローバル化は強烈な個人主義をその哲学としている」と指摘し、その結果、「この間に、人々の生活のあらゆる面がカネで勘定されるようになった。この現象を私は「市場社会」と呼ぶ。売り買いの対象は車やテレビだけでなく。健康や教育、人間関係にも値が付けられる。……市場社会のなかで、カネのない人々は不幸を感じている」という（読売新聞、今年1月3日朝刊）。フランス人のクリスティーヌ・ラガルド氏（国際通貨基金（IMF）専務理事）は、やはり「この20年の間に貧富の格差が拡大した。先進国に限ったことではなく、多くの国で起きている」としている（読売新聞、1月4日朝刊）。

4 現代社会の動向Ⅲ ICTおよびAIの普及・浸透と人間への深い問い

第3に、自然科学やテクノロジーの問題として、環境問題とか生命の操作の問題等、いくつもの深刻な問題が横たわっている。さらにICT技術のますますの進展の中で、IoTや人工知能、

いわゆるAIの社会システムへの浸透が大きく深く広がっている。

新井紀子国立情報学研究所教授によれば、「現在、ある一定の条件に基づく枠組みの中で情報を処理する能力は、すでにAIが人間を上回っている。しかし「価値観」のような要素が絡んでくると答えに到達するのが一気に難しくなる」「その時、人間が携わるのは、高い創造力や重い責任が求められるためAIにはできない仕事と、AIより人間を使う方が安いから人間にさせておく仕事に、二極分化すると思う」「特に、次代を担う子どもたちがAIを使う側になるか、使われるかは、教育にかかっている。大切なのは（記憶でなく）、物事の意味を理解し、思考し、表現できる力を養う教育である。AIが最も困難とするところだからである。」

その東口ボクんに読解力で劣る中高生がたくさんいることも判明したのです。これはツイッターなど、ごく短い情報や思いつきをやりとりするSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）に、コミュニケーションや知識獲得の場が偏っている影響でしょう。家の中に新聞や本のない家庭が増え、スマートフォンの画面を見るばかりで、論理的に構成された文章にほとんど接していない子どもが多い。すでに大人の世界も、論理的ではなく、断片的、感情的な情報で世論や政治が動き始めました。この風潮は、今後いっそう強まるかもしれません（読売新聞の1月6日の朝刊）。

5 仏教の可能性Ⅰ 空性としての絶対者、縁起観・無我観、覚への道

第1の、絶対者もしくは一元的価値の崩壊と価値観の混迷、という状況に対しては、仏教は人間の自由を縛るような有の絶対者は説かないこと、単に相対に対する絶対としての絶対者は説かないこと、しかし空性としての絶対者を説くことに、その独自の特質と可能性とを見るべきである。仏教は、自我も世界も、ありとあらゆる事物は常住の本体を持たず、無自性・空であると説いた。この一切の事物を貫く空のあり方は、究極の普遍として空性と呼ばれる。この空性がいわば絶対者にあたるが、それは単なる相対に対する絶対、現象に対する実在ではなく、相対や現象と不二の絶対者である。自己も自己を超えたものの中にあって成立しており、その根源の空性はまさに空を本質としていて、自己を規制したり束縛したりするものではない。むしろ個人の自由を保障するものとなる。

このように、絶対者はけっして死んでしまったのではなく、有の絶対者を突破して、無の絶対者に深まることによって、本来、自由な自己の成立基盤をもう一度、見いだすことができる。ここに仏教の貢献できる大きな要素がある。

第2に、グローバリゼーションの功罪、もしくはその行方の不透明性だが、この問題の根本には、強烈な個人主義がある。そこには、個人が個人で完結しているという、アトムの人間観がある。一方、仏教では無我を説く。あくまでもそのときそのときのかげがえのない主体はあるが、常住の本体のような自我（常・一・主・宰の我）はないという。

しかもこの無我の見方は、縁起の思想ともなる。自己は自己のみで存立しえているわけではない、他者を待ってはじめて成立し得ている、これが縁起の考え方である。それゆえ自己は、自他ともに支え合い、助け合い、補完し合ってはじめて生きていられる存在なのであって、このことを根本に据えて社会のあり方をも考えていくべきである。この無我観また縁起観は、やはり今後の多文化共生となるべき地球社会のあり方、新たな文明原理を考えるのに大きく資するであろう。

第3に、IoTやAIの進化に基づく人間性の喪失、ということについて、この問題を克服して

いくためには、第一に、人間はこの人生において何を目指すべきなのかをしっかりと自覚する必要性がある。

そもそも大乘仏教は、各人が仏になる道である。仏になるということは、自利利他円満、すなわち自覚覚他円満の存在になるということ。覚、菩提、覚りの智慧を成就することなのであり、その智慧はおのずから一切の他者の救済にはたらく原動力となる。親鸞も、『正像松和讃』の冒頭に、「弥陀の本願信ずべし、本願信ずるひとはみな、摂取不捨の利益にて、無上覚をばさとるなり」と謳っている。その無上覚とは、単なる分別（世間）を超えた智慧を発揮するもの（出世間）であり、すなわち自由自在に他者の救済を実現していくはたらきであり、そこでは本来、仏性に具わる無量の功德を発揮することにもなる。それは創造性の開発にもほかならない。仏教には、世間への批判的精神と創造性の発揮による他者への貢献を導くものがある。

このようにして、仏教は、空性・無我と縁起・覚への道というその独自の立場において、現代の地球社会の動向に、大きな役割を果たすことができると考える。

6 仏教の可能性Ⅱ 特に縁起の見方について

縁起（プラティートヤ・サムウトパーダ）とは、「縁りて起こる」ことを意味する。原因と諸縁（諸条件）とが合わさって初めて結果がある（因+縁→果）という見方。

縁起説には、原始仏教の十二縁起説、説一切有部の六因・四縁・五果による諸法の縁起説、瑜伽行派の阿頼耶識縁起説、華嚴宗の重重無尽の法界縁起説など、種々あり。

華嚴宗独自の縁起思想は、賢首大師法蔵の著作・『華嚴五教章』『義理分齊』第九の、「十玄縁起無礙法門義・六相円融義」等に見ることができる。以下、「六相円融義」を見る。

六相とは、総相、別相、同相、異相、成相、壊相である。この中、総相は、全体。別相の別とは、全体と区別されることをいい、つまり全体を構成する要素のこと。同相とは、それらの要素が等しく一つの同じ全体を作っていること。異相とは、それらの要素が互いに異なっていること。成相とは、それらの要素が関係を結んでいること。壊相とは、それらの要素がそれぞれ自分を守っていること。

さて、この中、総相についての説明には、概略、以下のようにある。

家を例として、初めに、その総相とは何かが問われる。家の全体が総相であるとの見方に対し、それは、たるき等、諸の建材の集合にすぎず、全体としての家とは何かがまだ答えられていないという。一体、全体とは何かと、あらためて問われる。

これに対し、一本のたるきが家という全体であると答える。いわば、一つの構成要素が、全体そのものだというのである。なぜなら、家は、たるき一本がなくては、完成しない。その一本のたるきがあればこそ、家は完成する。ということは、家の成立は、その一本のたるきにかかっているということである。したがって、たるきが家にほかならないという。

では、たるき一本が家を作るのなら、瓦などがないうちでも、そのたるき一本で家全体を作れるというのであろうか。この問いに対しては、次のように答えられる。たるきというのは、家の構成要素として、家の中に位置付けられてこそ、初めてたるきと呼ばれうるものである。ところが、建築中の家は家として完成しておらず、つまりまだ家ではない。家でないものの中にあるたるきは、本来、いまだたるきと呼ばれるべきものではなく、単なる一本の材木にすぎない。たるきでないものが、家を作ると言ったのではない。しかしたるきなら、家を作るのである。逆に家を作らないものは、たるきではないのである、と。

これに対し、また別の角度からの質問がなされる。たるきなどの諸の建材は、家全体を作るのではなく、それぞれ自分自身を作るのみ（少力）で、それらによって家を作ると見るのはいけないのか。この問いに対しては、断・常の過失があるという。少力だけしか発揮しないということは、全体を作らないということで、そうするとばらばらの建材があるだけであり、全体は成立しないことになってしまう。これは、断の過失である。一方、そのように家の全体が成立しないのに、しかも家があるとすれば、無いものを有とするのだから、常の過失になる。

さらに、そもそも諸の建材が全体に関与せず、少力しか出していないと見るなら、その一つの建材を取り除いても、家はなおあるということになるはずである。しかし、一つの建材でも欠けたら家の全体が成立しない以上、少力のはずはありえない、ともいう。

それにしても、一本のたるきがないくらいでも、家はありえているのではないか。その問いに対しては、それは破舎であって、好舎ではない。それゆえ、完全な家はひとえに一本のたるきに属してしいる以上、一本のたるきが家そのものにほかならない、とする。

こうして、一本のたるきが家であるという論理が説明された。すなわち、諸の構成要素の一つ一つは、全体にほかならないのである。この見方からすれば、個人は個人のまに社会全体と同等なのである。

以上の、ある建材と家全体との関係をふまえて、次にある建材とある建材との関係が考察される。すなわち、家全体が一本のたるきだとすれば、たるき以外の板・瓦等、他の建材もその一本のたるきであるということになるのか、と問う。その答えは、次のようである。すべて他の建材はその一本のたるきである。そのわけは、もし一本のたるきがなければ、家は成り立たない。家が成り立たないので、そこにある建材も、板・瓦等と名づけることができない。（それらの建材も、家の中に位置付けられて初めて、その建材の名を得る、その建材となるからである。したがって、板・瓦等がそれでありうるためには、家が成立していなければならず、家が成立するためには、一本のたるきにかかっている。）このゆえに、瓦等は一本のたるきにかかっているものであり、すなわち瓦等は一本のたるきそのもののなのである。このように、もし瓦等が一本のたるきであるという関係が成立しない場合、家も成り立たないことになる。家が成立しないと、たるきも瓦も成立しないことになる。しかし、今、家を見れば、たるきも瓦も、また家そのものも成立している。そうである以上、板・瓦等は、たるきと相即しているのである。

この関係は、一本のたるきだけにおいて成立していることではない。どのたるきも、どの建材も、同様の関係にあるはずである。このことを個人と社会において言えば、ある個人はあらゆる他の個人（他者）と、もとより相即しているということでもある。

こうして、ある構成要素と全体が一つであるだけでなく、構成要素と構成要素の間でも、互に相即している。ある個人は社会全体と不二一体であるとともに、他のあらゆる個人とも不二一体であるという。

家を構成している材料、建材は、さまざまに異なっているからこそ家ができる。柱だけでも、鴨居だけでも家はできない。それぞれの建材には差異があると同時に、むしろ異なるから切り離せない、区別されるから関係するというような事態が成立している。ここにある六相の見方を、社会全体と自己の間の関係において整理すると、次のようになる。

自己 = 社会

自己 ≠ 社会

自己 = 他者

自己 ≠ 他者

自己 ≠ 自己

自己 = 自己

7 仏教の課題 自由と主体性の復権を目指して

最後に、日本の仏教の中、浄土教のことについてちょっとふれてみたい。浄土教は、この娑婆世界を脱して、極楽浄土に往って生まれることを目指す。しかし親鸞さんの浄土教では、浄土に往ったら、還ってくるのだ、そうして衆生済度に励むのだ、と説いている。このとき、この世のうちにあっても、信心成就して不退転に住し、正定聚に入り、ゆえに仏となって無上覚を実現することが約束されているのであれば、すでに報恩行としての他者への関わりも出てきおかしくないであろう。

たとえば道元は、「身心に法いまだ参飽せざるには、法すでにたれりとおほゆ。法もし身心に充足すれば、ひとかたはたらずとおほゆるなり。」（『正法眼蔵』『現成公案』）と言っている。ここを浄土教によせていえば、阿弥陀仏の大悲の心が自分に行き渡らないうちは、「もう自分は救われた、大丈夫だ」と言ってそれで満足してしまう。けれども弥陀の悲心が自分の身心に充足し、本当に仏のいのちがその人に働いてくるならば、「自分はこれでは申し訳ない」という気持ちが出てくるはずだということではなかろうか。

本当にその自己の真実に徹底した時は、自己に本来はたらいっている仏のいのちを、少しでも十全に発揮する方向へと踏み出すことになる。自発的にそう進んで行かざるを得ないことになるということである。宗教的に救われた身になっているからこそ、その御恩に応えて生活してゆこうという方向になる。つまり宗教的に徹底すればするほど、現実の社会の問題にも無関心ではいられなくなるはずだということである。